

# 裏返しのサクセスストーリー

## ——メッケルの『隠し絵』に見る戦後ドイツ

渡 辺 将 尚

(ドイツ文学)

### 1

1980年に書かれたクリストフ・メッケル(Christoph Meckel,1935-)の散文作品『隠し絵——父について』は、詩人であり、ジャーナリストでもあった彼の父親の生涯をその幼少時代から追いつつ、父をふくめ、社会全体のナチス時代における行動——積極的に加担した、傍観したに関わらず——を徹底的に糾弾しようとするものである。メッケルの批判は、つぎの2点に集約される。まず第一に、ドイツの危機的状況のなかでもひたすら芸術の世界に浸ろうとする非現実性。第二に、高貴なるドイツ精神の体現であるドイツ兵へのあこがれである。メッケルは、父親のそのような気質にこそ重大な問題が潜んでいると見る。なぜなら、第一の非現実性は、自分が戦場に駆り出されながら殺し合いとしての戦争の意味を理解できない現実的判断能力の欠如へと、また第二のドイツ兵へのあこがれは、戦場における英雄的な行動への欲求へとそれぞれ受け継がれ、知識人として戦争を抑制しなければいけない立場にありながら、逆にそれを助長してしまったからである。

父親が持つこのような気質は、戦後も基本的に変わらなかった。したがって、このテキストがその最初から行ってきた批判は、当然戦争終結後を描いた後半部分でもひきつづき行われることになる。そこでは、父親がいかに古い考え方を捨てることができないか、その考え方がいかに時代に即していないかが繰り返し強調されている。このようなメッケルの激しい批判は、一見したところ戦後処理の問題を考える上でまったく正しい方法のように見える。しかし、語られる批判の内容のみでなく、このテキストが依拠する思考の枠組みおよびその前提条件までを視野に入れた場合、その正当性に対していくつかの疑問が生じてくる。本論では、徹底的な批判の背後に見え隠れする問題性に焦点を当ててみたい。

### 2

まずメッケルの父親および父親世代への批判をくわしく見てみよう。

## 1. 芸術に没頭する非現実性

シュヴァルツヴァルトに育ったメッケルの父にとって、風景や自然は一生涯あこがれの対象であり続けた。詩人である彼は、それらを好んで詩の題材にしていた。さまざまな風景をもとめて旅をすることもしばしばであった。しかし、メッケルはそのような詩人の生活およびそこから生み出される一連の詩の中に非現実性を見る。

「何度か彼はバルト海沿岸に立つギュンター・アイヒの別荘で数週間を過ごした。……カラスムギ、雨、星、彼らにとって時間を超越している(zeitlos)と思えるものが詩になった。」<sup>1)</sup>

「突撃隊が進軍し、ドイツ国議会が炎上し、彼自身追放劇の目撃者であったにもかかわらず(彼もある部隊に尋問され、本を調べられた)、彼は物語と詩を書きつづけた。そこに時代(die Zeit)は感じられなかった。」<sup>2)</sup>

父や彼の友人たちは好んで植物や自然現象をモチーフとして取り上げたが、それは一時の時代情勢に左右されず、たえず同じ姿を見せ続ける普遍的なものだからである。そこに政治など時代の制約を受けるものの入る余地はない。「政治に関しては、ほとんど話題にのぼらなかった。それは30年代ではめずらしいことではなかった。」<sup>3)</sup>

詩人たちのこのような生活は、危機的状況において模範的なものではないにせよ、無害なものとして容認してもよいように見える。しかし、メッケルはさらに痛烈な批判を浴びせ続ける。

「彼(＝父親)も、マルティン・ラッシュケ同様、国家社会主義が台頭する雰囲気について完全に鈍感であったはずはない。しかし、彼は現実の政治を認識することができなかったし、その後もできないままであった。」<sup>4)</sup>

メッケルの父は、第三帝国に対して非常な嫌悪感を持っていた。本来であれば、彼は知識人として何らかの行動を起こすべきであった。ところが彼は、国家社会主義が高揚してくる様子を目の当たりにしても、その意味を解せず、それに対して適切な行動をとることができなかった。実際に彼にできたのは、「時代から文芸への回帰」<sup>5)</sup>を声高に叫び、現実逃避をすることだけだった。父および彼と思想を同じくする者たちが、文学に対していかに最高の価値を認めようとも、結局は現実のドイツが直面する問題に対しては無力であった。

## 2. ドイツ兵へのあこがれ

メッケルの父は、「自分からナチス国家やこの戦争を支援するようなことは決してしない」<sup>6)</sup>とかたくなに決心していた。彼は、第三帝国を嫌悪していたし、現実の政治から目をそむけて美しい文学の世界に浸りきっていたから、そのような決心をすることも当然であると言える。しかし、彼が招集され、実際に戦地に赴くようになると、その決心はあとかたもなく消え去ってしまう。

「あらゆる休暇の間をのぞけば……彼は兵士であり、ますますその度を深めていった。」<sup>7)</sup>

「彼はいつも前線への投入を夢見ていた。」<sup>8)</sup>

代わって顔をのぞかせたのは、前線に出て勇ましく活躍する兵士へのあこがれであった。この変貌ぶりは、一見するとまったく一貫性がないようにも思える。しかし、高貴なるドイツ精神へのあこがれが、それらをいとも簡単に結び付けてしまう。彼は、ドイツ兵も、美しい文学も、高貴なるドイツ精神の体现であると感じていたのである。両者とも、彼にとっては同じ範疇に属するものであった。メッケルは、このように考える父には道徳的判断が欠けていたと見る。

「訓練の意味（敵の殺戮・抹殺）は、このロマン主義者には意識されていないようだった。」<sup>9)</sup>

「彼なら憤慨しながらも服従し、ひょっとしたら血を流す方法だけを非難し、血を流すことそのものは非難しなかったかもしれない。」<sup>10)</sup>

自らも高貴なるドイツ精神の体现者になろうと盲目的に突き進む父には、もはや戦争の意味——大量の人間が傷つき死ぬ——など理解することはできなかった。彼にとって、戦場でのドイツ兵としての自分の役割はすでに明確であった。すなわち、他民族に対して模範を示し、ドイツ精神を拡大、浸透させていくことである。そう考える彼は、軍の権威システムの中に徐々にとりこまれ、自分自身昇進し部下を従えることによって、ますます順応していくことになる。

「彼はもはや権威に従属するだけではなくなった。彼は士官となった。彼自身他の者を支配下においていた：権威として」<sup>11)</sup>

権威システムへの順応は、彼をさらに危険な方向へと導いていく。権威の矛先が、ドイツ軍内部だけでなく、外に対しても適用されるようになるのである。

「権威は彼の様相を変えた。……彼はおそらく反ユダヤ主義者ではなかったが、ユダヤ人の排除を運命だと見ていた。」<sup>12)</sup>

メッケルは、ロマン主義やドイツ精神へのあこがれなど、それほど害のないように見える父の思想が、実はドイツの危機を救うどころか、逆に助長させたのだと考えるのである。<sup>13)</sup>

父は、戦争終結後しばらくの間、捕虜収容所に抑留されるが、その後釈放されてメッケルら家族のもとへ帰ってくる。子供たちははじめ父の帰還を喜んだが、しだいに幻滅を感じるようになる。戦前に形成され、戦争およびナチズムを結果的に助長した彼の思想は、敗戦を経験したにも関わらず、何ら変わっていなかったからである。

「『子供は何のためにいるのか』という言葉が（父の口から）始めて出てきた。（彼にとって）子供はあらゆる仕事に便利な存在で、意味の分からないまま仕事を強制された。」<sup>14)</sup>

「庭仕事と古典文学の読書。……あいかわらず同じ牧歌的イメージの生産。超時間性と運命への病的欲求。

その他すべては不確かなものだった。」<sup>15)</sup>

2つの引用文のうち、前者は権威への、後者は非現実性への欲求である。そのような父の態度は、もはや子供たちに対して強制力をもたず、ただ幻滅を与えるだけだった。そうしているうちに、子供たちは次第に父親を「他人となった人間」<sup>16)</sup>、「もはや問題にならない存在」<sup>17)</sup>と考えるようになるのである。

### 3

敗戦を経験しても何も変わらない父親に対する批判はこのあとも続いていく。しかし、便宜上、戦争終結時を境にして、テキストを前半と後半に分けるとすれば、後半における批判の方法は、前半では登場することのなかったある枠組みに依拠している。「家の中」と「外の世界」（これらの語がテキストにおいて使われているわけではない）という二項対立である。「家の中」とは、実際の家の内部空間だけでなく、父親が自分の意思で行動し、他を意のま

まにできる世界すべてを指すものとする。一方、「外の世界」は、逆に自らが順応していかなければならない世界のことである。では、なぜ前半において、この枠組みが用いられなかったのだろうか。仮にこの枠組みをあてはめて、ふたたび前半部分について考えてみよう。

この場合「家の中」とは、父が美しい文学の世界に浸り、現実逃避をする場であり、「外の世界」とは、ナチズムが支配し、戦争が行われる場である。この枠組みでいけば、仲間の詩人たちと美しい文学の世界に浸り、現実にも目をそむけていた彼は、元来完全に内側の世界の人間である。しかし、いよいよ召集がかかり戦地に赴くと、彼は突然「外の世界」に直面させられる。そこは、決して自分の意のままにはならず、無難に立ち回するためには、どうしても順応が必要になる世界である。彼は、自らの現実離れした詩人氣質とは無関係に見える「外の世界」に見事に順応し、ついに士官にまで昇進することになるのである。

ここまでの時点において、メッケルの父は、「家の中」と「外の世界」という2つの空間をうまく渡りきり、特に深刻な衝突を起こしてはいない。なぜなら、ひたすら文学に没頭し現実の社会を忘れる「家の中」も、戦争状態にある「外の世界」も、いってみれば両者とも「病的」な状態であったからである。しかも、父親が後継者であると自認する伝統的なドイツ精神からすれば、いずれの世界も彼にとっては受け入れ可能なものであり、またいずれの「病氣」にも彼は免疫をもちあわせていなかったのである。前半部分において二項対立が用いられないのは、「家の中」も「外の世界」も結局は同質のものであり、そのような二項対立自体存在しなかったからである。<sup>18)</sup>

では後半はどうか。まず、父親が安住できる「家の中」の世界に関する描写を見てみよう。

「父は変わり果てて家に帰ってきた。父は負傷していた。彼には配慮が必要だった。……彼への配慮は家族の病氣となった。」<sup>19)</sup>

父は戦場で頭部に銃弾を受けた。引用文中の「変わり果てて」とは、負傷を負ったという外見的变化のことで、思想的なものではない。そのような父に対して、家族は十分に気を遣わなければならなかった。しかも、引用文中で「病氣」と表現されている通り、家族に要求されたのは、通常のものではない異常な気遣いだった。なぜなら、父にとって必要な配慮とは、彼をふたたび家族の中心として、つまり権威として復権させることだったからである。

「彼は、車と蔵書とワインセラーを家族に自由に使わせた。彼は家事を手伝い、みんなに気に入られるようにした。……彼は手伝いや贈り物をすることで彼らを得ようと努めた。」<sup>20)</sup>

戦場で士官として権威をにぎっていた彼は、今度は家の中で、子供たちを所有し、意のまま

に行動させることで、同じような権威の場を作ろうとしたのである。しかし、そのような家の中の雰囲気に対して、メッケルはただ息苦しさをを感じるだけだった。

「(家の中には)目的がなく、美しく、贅沢なものがなかった。……歌ったり、走ったり、夢を見たり、歓喜したりすることがなかった。」<sup>21)</sup>

このように病的あるいは異常な「家の中」の状況がますます強調されていく中で、そのところどころに「外の世界」に関する描写が挿入されている。ここでいう「外の世界」は、具体的には戦争終結後数年経ったドイツ国内の状況である。では、後半になって突如として登場する二項対立のもう一方の極——「外の世界」——はどのようなものだったのだろうか。

「朝早くと夜遅くに通りをぶらつくこと、自由な空気を吸うこと、見ることをゆっくり学んでいくこと (das...langsame Sehen-lernen)、監視されずにひとりで歩くことは私の幸せだった。」<sup>22)</sup>

「外の世界」とは、まず「自由な」世界である。たえず「監視」されて生活する権威主義的な「家の中」とは完全に対照的である。いいかえれば、それは健全な世界である。メッケルは、この健全な世界でのみ、「見ることを学んでいくこと」、つまり落ち着いて物の見方・世界観を身に付けていくことができたというのである。

さらに別な例を見てみよう。

「……魔法は一時間もすれば消え去ってしまった。

父は浴槽に水を張った。

家に持ち込まれたものはすべて徹底的に洗い流された：足の汚れと開放的な喜び、髪の毛の汗と自由な経験、両親のどちらもいない、管理も義務もない幸福。」<sup>23)</sup>

当時まだ少年だったメッケルは、息苦しい家を出て、外に遊びに出かける。「家の中」に比べれば、「外の世界」での開放感是一种の「魔法」である。しかし、その「魔法」は、家に帰り、父親が入れた水の中で外の汚れを落とすと同時に消え去ってしまう。ここでも、直前の引用文（注釈22）と同じイメージが繰り返し用いられている。この引用文での「管理」および「義務」は、先の「監視」に対応しており、「開放的」および「自由」は、先の「自由な空気」にそれぞれ対応しているのである。二項対立によって、父親の異常性はますます前面に押し出されてくるが、その父親が支配する「家の中」の世界は、メッケルがどんなに逃れようとし

ても逃れられるものではなかった。しかし、救いは存在した。

「だめになるか、強くなるかしかなかった。まだ学ぶべき笑いがあった。どこか別のところに。」<sup>24)</sup>

彼は、父親の支配を逃れて、「笑い」のある健全な世界を見つけ出さなければならない。そうしなければ、彼はそのまま父親のもとで墮落するしかない。彼は、その救いがもうすでに存在することを知っている。あとはそれを見つけ出し、自分のものとすればよいだけである。ただし、それは「家の中」にはない。「家の中」は、「笑い」などという余分なものの入り込む余地などない、非常に無味乾燥な世界である。救いは「どこか別のところ」、つまり「外の世界」にあるのである。<sup>25)</sup>

#### 4

メッケルの父親批判の手法は明らかである。テキストの後半において「外の世界」の健全性を持ち出し、それと対比させることで、父親の異常性がしだいに強調されていく仕組みになっていたのである。父親の異常性は、日に日に度を増していくように描かれている。しかし、この対比の論法に問題がひそんでいる。つまり、メッケルが父親の異常性について言及するとき、その根底には、いつも「外の世界」の健全性がその前提として働いているのである。しかも、父親批判を目的とするこのテキストでは、この前提は絶対に疑問に付されることはない。もし、この前提がくずれ、メッケルもふくめたドイツ全体が依然として病を抱えているのだとすれば、父親は批判の対象とさえなくなってしまうからである。メッケル自身が住む「外の世界」が——一時異常な状態に陥ったのだとしても——正常であるという前提条件が働いているからこそ、父親批判が意味をなしうるのである。さらに、その正常性は、父親が異常であればあるほど、より引き立てられる。このテキストが目標とするのは、父親世代の責任を徹底的に追及することであった。表題の『隠し絵』とは、ともすれば見過ごしてしまいがちな戦争の本質を白日のもとにさらすというメッケルの意図を示しているであろう。ところが、彼らの異常性を強調し、前面に押し出すことによって、同時に自らの住む世界の正常性も主張されることになる。問題なのは、「外の世界」が無批判のまま、メッケルが嫌悪する「家の中」と対照される形で、健全な世界へと祭り上げられてしまうことなのである。その健全な世界は、戦争を引き起こしたドイツ人の問題性を完全に解決した上で築かれたものではない。その健全性とは、病の元凶のある限られた空間——「家の中」の世界——に押し込め、無視することによって成立しているものだからである。

それと同時に、直接的に表現されない裏返しのゆがんだ形で、ドイツが戦後の混乱した状

況から見事に立ち直っていくサクセスストーリーが誕生する。前半で語られる「外の世界」では、ナチズムが支配する時代があり、戦争があり、敗戦があった。この時代はドイツにとって「病的」な時代と言える。しかも、この「病的」な状況は、ドイツ国民によっても下支えされていた。なぜなら、彼らもまた時代状況と同様、病に犯されており、国家の病気に目をそむけたばかりか、その病を促進させたからである。しかし、後半において「外の世界」は変化する。確かに、戦前の権威が今度は「家の中」に場所を変えて、以前とまったく同じ思想に固執し、同じ権力構造を維持し、その中で今まで通り権威の座に居座ろうとしていたという状況を見れば、戦後も基本的にドイツ国民の病は治癒してはいないと言えるかもしれない。しかし、「外の世界」は改善の兆しを見せ始めている。そこでは、ほんの一時「病的」な時代はあったものの、ふたたび正常な世界がつくられ、人は解放されて自由な空気を吸うことができるようになっているのである。その健全な世界をつくりあげたのは、次世代を担う新しい人間たちである。戦争に加担した古い世代は、すでに「問題にならない存在」として無視されている。今は完全なものでなかったとしても、いずれ完全な「正常」さに到達するはずであり、この「外部」の世界には「まだ学びうる笑い」、つまり「正常」で喜びのある生活への可能性が残っているのである。

1950年代の西ドイツは、西側諸国に組み込まれ、その経済システムの中で高度成長をとげた時代であった。その中で、終戦直後戦勝国によって裁かれたナチスの中枢にいた者たち、または大量殺戮において重要な役割を果たした者たちが、つぎつぎと釈放され、ナチズムは不問に付されていく。<sup>26)</sup>そして、この「経済奇跡」によって「過去のタブー化」<sup>27)</sup>も同時に進行する。「そのようにして、幅広い層が、『経済の奇跡』によって手に入れたものを、ファシズムにとってかわる満足な政治的・社会的新秩序として理解し、これによって過去は十分に克服されたと思おうとした。」<sup>28)</sup>メッケルの『隠し絵』における戦後社会の描写も、新しい世界が古い世界にとってかわることによって健全性が生み出されるわけだから、基本的に「経済奇跡によって、過去は克服できた」とする主張と同一線上にある。

その1950年代から、『隠し絵』が書かれる1980年までの30年の間に、ドイツ人は過去の戦争犯罪に関して、さまざまな経験をしている。たとえば、1963年の「アウシュヴィッツ裁判」をはじめとする一連の裁判では、これまであまり知られていなかったか、知られていても忘れ去られていた事柄が明るみに出された。<sup>29)</sup>また、1960年代後半の学生運動は——その発端にはさまざまな要因があり、その評価にもさまざまな見解があるとはいえ——忘れ去られようとしているドイツの過去について改めて考えるよう要求した。<sup>30)</sup>しかし、『隠し絵』は、そのような出来事を経ても、1950年代の「過去のタブー化」に依然として立脚している。終戦直後から、『隠し絵』にいたる流れは、過去の犯罪に関して、忘却と想起との間を揺れ動くドイツの姿を映し出していると言えるだろう。



注

- 1) Christoph Meckel : Suchbild. Über meinen Vater. Düsseldorf(claassen) 1980. S.27.
- 2) ibid. S.29. なお、引用文中の ( ) は原文のまま。
- 3) ibid. S.45.
- 4) ibid. S. 31. ( ) 内は引用者による説明。
- 5) ibid. S.33.
- 6) ibid. S.51.
- 7) ibid. S.64.
- 8) ibid. S.65.
- 9) ibid. S.67. ( ) は原文のまま。
- 10) ibid. S.70.
- 11) ibid. S.72.
- 12) ibid. S.73.
- 13) メッケルは、父親が戦争に加担してしまったのは、彼がドイツ精神へのあこがれを抱いていたからだとしているが、このようにあらゆる責任を個人が抵抗できない大きな力(この場合はドイツ人が伝統的に維持してきたドイツ精神)に帰する動きはこのテキストに限ったことではない。特に終戦直後、「全体の方向としては、罪は、ナチスの最高幹部クラスに押し付けることによって、それ以外の追従者や『一般の人々』は理解を超えた残虐と無縁か、それどころかナチス支配と戦争に苦しんだ被害者になり変わりがちであった。」(三島憲一:ドイツ知識人の果たした役割(『戦争責任・戦後責任』所収(朝日新聞社) '94. 126頁。)具体例を挙げるとすれば、精神医学者 C.G.ユング(1875-1961)は、多くのドイツ人がナチズムに熱狂したことについて、現代人が遠い昔にすでに克服したと思い込んでいる「嵐と陶醉の神」(C.G.Jung : Wotan. Gesammelte Werke. Düsseldorf(Walter) 1995. Bd.10. S.204.)ヴォータンの再来であると説明した。「・・・今起こっている出来事責任を、人間ではなく神や神々に負わせてよいとするなら——ヴォータンをその原因として仮定しても、おそらく的外れではないだろう。」(ibid. S.209.)
- 14) Meckel : Suchbild. S.111. 『 』内は、原文ではすべて大文字で表記され、引用符は使用されていない。( ) 内は、引用者による補足。
- 15) ibid. S.178. 文中の改行は原文のまま。
- 16) ibid. S.111.
- 17) ibid. S.114.
- 18) ハンス・マイヤーは、ドイツの「病氣」の元凶を復古主義の中に見ているが、その「病氣」が第二帝政からワイマール共和国を経て、第三帝国に至るまでドイツの幅広い層に共有されていたことについて、つぎのように述べている。「帝国主義的復古主義は、共和主義的復古主義によって終わりを迎えた。」(Hans Mayer : Wendezeiten. Über Deutsche und Deutschland. Frankfurt am Main(Suhrkamp)1993.S.28f.)つまり、帝国主義(第二帝政)から共和主義(ワイマール共和国)に移行しても、復古主義的傾向は一切変わらなかったというのである。メッケルの父の思想も、ドイツの伝統に固執し、その再現を目指すという意味で一種

の復古主義であり、時代全体の「病氣」をやはり共有していたと言える。

- 19) Meckel : Suchbild. S.112.
- 20) ibid. S.133.
- 21) ibid. S.140f.
- 22) ibid. S.113.
- 23) ibid. S.139f. 文中の改行は原文のまま。
- 24) ibid. S.151. ヘルマン・ヘッセの長編小説『荒野の狼』の主人公ハリー・ハラールも、メッケルの父と同様、ロマン主義的であり、ドイツの伝統に深く沈潜した人物であった。そのハラールが、伝統から脱するために必要としたのもやはり「笑い」であった。「いつか私は笑いを覚えるであろう。」(Hermann Hesse : Steppenwolf. Gesammelte Werke. Frankfurt am Main (Suhrkamp) 1970. Bd.7. S.413.) どちらのテキストでも、ドイツの伝統は重苦しいものであり、それは軽快さの不足からくるものだと考えられている点が興味深い。
- 25) 実際は、ナチス時代の残党がふたたび社会で支配的な地位に復帰するという状況もあった。「この中(=1959年の連邦議会への請願書)で、ナチス政権下で恐怖裁判や死刑宣告に関わった検事と裁判官を職務から追放し、同じように犯罪に関わった医者にも診療をさせないように要求された。」(Christel Hopf : Das Faschismusthema in der Studentenbewegung und in der Soziologie. In : Radikalisierte Aufklärung. Studentenbewegung und Soziologie in Berlin 1965 bis 1970. Hrsg. Heinz Bude, Martin Kohli. Weinheim und München (Juventa) 1989. S.75.) また、「ユダヤ人の墓が辱められたり、シナゴークにハーケンクロイツが落書きされたりすることが、1945年以降しばしばあった。」(Alfred Grosser : Deutschlandbilanz. Geschichte Deutschlands seit 1945. München (Hanser) 1980. S.313.) しかし、それでもなお、自分たちが生きる「外の世界」はメッケルにとって健全なのである。
- 26) 「昨日の敵ドイツ人は、今や同盟のパートナーとして必要とされた。西においても東においてもである。・・・同盟の成立には、何らかの対価が必要だった。つまり、戦争犯罪人の恩赦である。」(Ralph Giordano : Die zweite Schuld oder Von der Last Deutscher zu sein. Hamburg (Rasch und Röhring) 1987. S.117.)
- 27) 木谷勤・望田幸男編著：ドイツ近代史（ミネルヴァ書房）'92, 199頁。
- 28) Marion Grob : Das Kleidungsverhalten jugendlicher Protestgruppen in Deutschland im 20. Jahrhundert. Münster (F. Copenrath) 1985. S.176.  
また、第二次世界大戦の責任の所在に関する1952年の調査では、「ドイツ」にあると答えた割合が32%、「他の国々」24%、「双方」18%であった。(Grosser : Deutschlandbilanz. S.307) この数字には、戦後行われた忘却のためのさまざまな試みも影響を与えている。「50年代末までにこれらの『痕跡』は消却され、プラグマティックに利用されて、現在一未来志向の都市空間はナチ犯罪を忘却したのである。」(高橋秀寿：ナチズムを、そして20世紀を記憶するということ〔『ナチズムの中の20世紀』(柏書房)〕'02, 283-284頁。)
- 29) 「戦後丸20年が経過して、ようやく多くの人が公けにまた詳細に、その間隠され、忘れられ、抑圧されてきたことを聞くにいった。」(Gerhard Werle, Thomas Wandres : Auschwitz vor Gericht. Völkermord und bundesdeutsche Strafjustiz. München (C.H. Beck) 1995. S.42.)
- 30) 「彼(運動家のひとりハルトゥング)は、学生運動が、市民にはびこるファシズム理論が意図する『歴史の否定』を暴き出したと語っている。」(Lothar Voigt : Aktivismus und moralischer Rigorismus. Wiesbaden (Deutscher Universitätsverlag) 1991. S.254. ( ) 内は引用者による補足。)

## Die erfundene Erfolgsgeschichte ——Christoph Meckels „Suchbild. Über meinen Vater“——

Masanao WATANABE

Christoph Meckel(1935-) übt in seinem 1980 erschienenen autobiographischen Werk „Suchbild. Über meinen Vater“ Kritik an seinem Vater, der den zweiten Weltkrieg ideologisch unterstützt hat.

Das Interessante an diesem Werk ist, dass Meckel auch das Verhalten seines Vaters nach dem Krieg kritisiert. In der Krisensituation während des Krieges war sein Vater ein Romantiker, der sich nicht mit zeitgenössischen Problemen auseinandersetzen kann. Als Gelehrter hätte er eigentlich dazu beitragen sollen, Deutschland zu retten. Sein Charakter blieb auch nach dem Krieg unverändert. Meckels Vater, dessen Denkweise noch sehr traditionell geprägt war, konnte in der neuen Gesellschaft keine Rolle mehr spielen und sich noch anpassen. Es ist das eigene Verschulden von Meckels Vater, dass er weder während des Krieges noch nach dem Krieg richtig gehandelt hat.

Diese Kritik selbst scheint ganz richtig zu sein, doch sollte man die folgenden zwei Punkte bedenken : 1. Meckel geht von der folgenden unkritischen Voraussetzung aus : Deutschland war zwar während des Krieges geradezu *krank*, ist aber nach dem Krieg sofort wieder *gesund* geworden. Die Schuld des Vaters ist, dass er sich selbst trotz der Veränderungen der deutschen Gesellschaft nicht geändert hat. Problematisch ist, dass Meckel dieser Voraussetzung keinen festen Grund gibt. Die *Gesundheit* der deutschen Gesellschaft nach dem Krieg wird von vornherein als selbstverständlich vorausgesetzt und nie geprüft. Denn wenn sich diese Voraussetzung als falsch herausstellen sollte, würde auch die Kritik am Vater ihre Bedeutung verlieren. Je mehr die *Gesundheit* der deutschen Gesellschaft betont wird, desto mehr tritt die *Krankheit* des Vaters hervor. 2. Die *Gesundheit* der deutschen Gesellschaft und die *Krankheit* des Vaters hängen stark miteinander zusammen. In diesem Schema kann die *Krankheit* des Vaters ebenso die *Gesundheit* der Gesellschaft abstechen lassen : Je mehr die Krankheit des Vaters betont wird, desto mehr tritt die *Gesundheit* der deutschen Gesellschaft hervor. Basiert auf der

Kritik an seinem Vater wird—nicht direkt, sondern auf verzernte, umständliche Art—die Erfolgsgeschichte von Deutschland erfunden, das bittere Krisen überwunden und seine Gesundheit zurückgewonnen hat.